京都大学	博士（文学）	氏名	松原繁生
論文題目	ドストエフスキーはなぜ『カラマーゾフの兄弟』を書いたのか ――『作家の日記』からの考察――		

（論文内容の要旨）

19世紀ロシアの作家フョードル・ドストエフスキー(1821-81)の最後の長編小説『カラマーゾフの兄弟』(1879-80)には、それまでの作品には見られなかった希望のきざしのようなものが感じられる。本論文は、父親殺しについて無実であるにもかかわらず、自分には「万人に対する罪」があると考え、その贖罪のために20年の流刑を受け入れるドミートリー・カラマーゾフの姿に、「絶望の作家」「残酷な才能」などと評されることの多いドストエフスキーの晩年に突如生じた思想的転換の反映を認め、その原因と過程を探求することを主要な課題としている。

この課題を遂行するうえで本論文は、①「空想的社会主義者」から民衆と民衆の信じるロシア正教に根ざそうとする「土壌主義」への移行のきっかけとなったシベリア流刑後のこの作家の言説を時系列に即して考察していくこと、②作品テキストの考察とともに、とりわけ晩年のドストエフスキーが発行していた個人編集の雑誌『作家の日記』(1873、76-77、80-81）収録の論考や小品を彼の見解の直接的な表出として精査することの２つを方針としている。前者はシベリア流刑をドストエフスキーの思想の断絶の契機と見なす定説に基づいているが、後者は文学作品に比して従来低く評価されがちだった作家のジャーナリスティックな言説を重視するもので、本論文の独創的な点のひとつである。

第１章では、作家自身のシベリア流刑の体験に取材した小説『死の家の記録』(1861-62)が取り上げられている。主に作品テキストの緻密な読解を通じて、この小説の中でドストエフスキーが、独房他の西欧から導入された合理的・啓蒙的な新制度がロシアの囚人にとっては「他律的な罰」に過ぎず、その更生に益するところが少ないとしてこれを斥けていること、内なる精神上の苦悩に苛まれる囚人たちがその苦悩によって自ら浄化されていく「自律的な罰」にこそ精神的な真の復活の可能性があると考えていたことが明らかにされている。この「自律的な罰」の理念が、シベリア流刑以降、晩年までのドストエフスキーの思索の軸となった。

第２章では、『罪と罰』(1866)が反啓蒙・反理性主義の観点から考察の対象となっている。主人公ラスコーリニコフが幾度となく窮地に陥りながらも、それらを逃れる展開に読者が引き込まれるのは、「明確な証拠がない限り何人も訴追されることはない」という罪刑法定主義を前提としているからである。だが、そのような「他律的な」価値観に依拠しようとするラスコーリニコフを、彼がしばしば体験する惑乱や悪夢のかたちで「自律的な罰」が襲う。これは罪刑法定主義に代表される西欧の功利主

義的な「罪と罰」の考えでは真の更生と魂の安らぎは得られないというドストエフスキーの思想の表れである。

本論文は、『罪と罰』における「自殺」の問題も、この観点から論じている。当初の構想では自殺するはずだったラスコーリニコフは、最終稿では惑乱や悪夢に悩まされた末に「弁証法より日々の暮し」を重視せよとの予審判事ポルフィーリーの助言に沿うかのように、シベリアで精神的に甦っている。その代わりに夢を見ない（すなわち「自律的な罰」に苦しむことのない）ままに自殺するスヴィドリガイロフの形象がドストエフスキーの構想に生じてきた過程を、本論文は草稿研究のこれまでの蓄積に基づきながら辿っている。

このように第２章までで転換前のドストエフスキーの思想を論じた後、本論文は第３章から、1876年に始まる作家の思想的な転換の過程を綿密に追っている。その際には、この年から定期刊行が始まった個人雑誌『作家の日記』掲載の時事的な問題や事件に関するドストエフスキーの論説と、それらに触発されて書かれた短編小説が、作家の見解の直接的な表明として主要な考察対象となっている。

第３章で取り上げられている『作家の日記』誌発表の短編『おとなしい女』(1876)は、ドストエフスキーの思想的転換直前の作品として重要である。『罪と罰』で「弁証法より日々の暮し」を重視する立場を明らかにしたドストエフスキーだが、すべての問題が解決したわけではなかった。1864年に最初の妻マリヤが死んだ時からの「自分を愛するように他人を愛せない」という意識は、1870年代半ばになっても、なお作家を苦しめていたが、そこに彼を震撼させる自殺事件が相次いで起こったのである。貧しいお針子の飛び降り自殺を「自分自身の責任」のように考えるドストエフスキーにとっては、他人の自殺が続く限り魂が休まることはない。自分が生きていくだけでは不十分なのである。「他人を愛せない」という長年の課題に自殺の問題が絡み合って回答を迫ってくる。

本論文では、自我の支配欲、他者への所有欲にとらわれていた語り手／主人公が最も身近な他人であるはずの配偶者の自殺に茫然自失するまでを描いた『おとなしい女』が、作家自身の二番目の妻アンナに対するエゴイズムの自覚と自殺の問題とが絡み合って生まれたものであることが、ドストエフスキーがアンナに送った11通の手紙他に基づいて明らかにされている。この作品で「自分を愛するように他人を愛せない」という積年の課題が解決し、ドストエフスキーの思想に大きな転換が起こったわけではないが、この課題を解決すべく、一筋の灯りも見えない中でもがき苦しむ姿勢があったからこそ、次の段階での転換があり得たのである。

このように陰鬱な『おとなしい女』からわずか５か月後に書かれた短編『おかしな人間の夢』(1877)では、夢を見て自殺を思いとどまり、「他人のために直ちに善行に赴く」ことを決意する男の姿が描かれている。この急激な転換は、どのようにしてド

ストエフスキーに生じたのだろうか。

本論文は第４章で、『おとなしい女』と『おかしな人間の夢』の間の時期に『作家の日記』誌に掲載されたユダヤ系医師ヒンデンブルグについての記事に着目している。自我に執着しないヒンデンブルグはまわりの人の幸福を優先し、民族や階層の別なく治療して、しばしばその代金を受け取ろうともしなかった。この医師はドストエフスキーにとって「直ちに善行に赴く」という行動律の具現であった。即時の善行が良い結果につながり、まわりの人を幸福にすると同時に、ヒンデンブルグの幸福感を高め、それがさらに次の善行につながるという良い循環が成立している。ドストエフスキーは、その反ユダヤ主義にもかかわらず、地域のあらゆる民族、あらゆる階層に敬愛されたこのユダヤ人医師の生き方に、「自分を愛するように他人を愛する」ために必要なことが行動であり、徹底して実践的でなければならないという教訓を見いだしたのである。本論文はこの急激な転換の過程を、『作家の日記』の記事と同時期の書簡、『おかしな人間の夢』の最終校正稿にドストエフスキーが施した推敲などの検討を通して、綿密に跡づけている。

第５章では、このような転換を経験しつつあったドストエフスキーが、実際に善行の「即時の実行」をおこなった例として、ヒンデンブルグ医師についての記事や『おかしな人間の夢』の執筆と並行して展開された「コルニーロワ裁判」(1876-77)に対する無罪判決獲得運動が紹介されている。母親が幼い継子を高い窓から投げ落とすというこの殺人未遂事件の原因を、当時妊娠していた母親の一時的な精神のアンバランスと主張し、したがって無罪が妥当であり、その方が当の母子や家族に「善き種を蒔く」ことになるという、『作家の日記』誌でドストエフスキーが張った論陣は世論を動かし、裁判所は事件の再審をおこなった結果、無罪の宣告を下している。この事件をめぐる実体験からドストエフスキーは社会への啓発の可能性を直に確かめるとともに、啓発の意義を本当に理解する人はまだ少数に過ぎないことを当時のジャーナリズムからの黙殺によって痛感もさせられたと、本論文は指摘している。

第６章の冒頭では、ドストエフスキーが、ようやく収入の安定をもたらしてくれた定期刊行誌『作家の日記』を一時休刊してまでも『カラマーゾフの兄弟』の執筆に専念し、作中で主人公のひとりであるドミートリー・カラマーゾフに冤罪による流刑を受け入れさせた理由が、小説家にとっての善行とは畢竟、創作の他にはないとドストエフスキーが確信していたこと、したがって小説を通しての啓発を志していたことにあったことが、執筆に着手する前後の作家の書簡の記述等を根拠として指摘されている。

第６章ではその後、第12編「誤審」における裁判の場面を中心に、『カラマーゾフの兄弟』が考察されている。この作品でも「自律的な罰」の主題は継続しており、その意識が主人公である兄弟たちにどのように作用しているかが分析されている。精神的に荒涼とした非嫡出子スメルジャコーフには「自律的な罰」のメカニズムは働か

ず、父フョードルの殺害によっても、また犬に針入りのパンを食べさせたことによっても彼に苦悩は生じていない。この点で彼は、命をすり減らすほどの苦しみを味わう「謎の客」やイリューシャと対照的である。「自律的な罰」は次男イワンには作用しかけているのだが、『罪と罰』のラスコーリニコフに比しても強い自尊心と自我が妨げとなって、イワンは譫妄状態に陥り、悪魔しか見えなくなってしまう。

『カラマーゾフの兄弟』の執筆へとドストエフスキーを駆り立てたのは、『おかしな人間の夢』やその前後の論考で示唆されている、「全ての人間に対する罪の自覚」に基づく「贖罪としての善行」への志向にほかならない。「全ての人間に対する罪の自覚」自体は『カラマーゾフの兄弟』で初めて出てくる思想ではない。『悪霊』(1871-72)第三部において逗留地で死ぬ直前のステパン・トロフィーモヴィチがそのような自覚を吐露しているが、これと『おかしな人間の夢』執筆時の「おのれみずからの如く他の人たちを愛する」可能性、「善行の即時実行」への志向とが結びついて、「自我の強さという原罪」「全ての人間に対する原罪」の自覚に基づく「贖罪としての善行」の主題が、『カラマーゾフの兄弟』の時点で長男ドミートリーという形象を得たのである。

彼が裁判の場で悔悟するのは「全ての人間に対する罪の自覚」からであって、「親父を殺した」からではない。彼がシベリアへの流刑を受け入れるのは、新天地での善行を決意したからにほかならない。ドストエフスキーが、西欧由来の陪審員制度などによる「他律的な罰」の空虚さを裁判の場面で浮き彫りにした後に、ドミートリーが「自律的な罰」を自身に課し、精神的に復活していく姿を描いていることの重要性を本論文は指摘している。

終章は、第６章までの考察を総括した後、ドストエフスキーが最晩年の時期に、希望を感じさせる『カラマーゾフの兄弟』執筆に専念した理由を、次のようにまとめている。①晩年のドストエフスキーが抱えていた課題は、おのれの自我によって「おのれみずからの如く他の人たちを愛することができない」ことであり、彼はそれを人間の原罪であると考えた。②ドストエフスキーはその原罪を贖うためには「全ての人間に対する罪の自覚」に基づいて「贖罪としての善行」に励むことが必要であるとの認識に至り、その具体的な実践として「文筆を通じての啓発活動」に着手した。③その際、より良く書くことのできる形式として、ジャーナリスティックな評論ではなく長編小説が選択された。こうして彼は1877年12月号を最後に『作家の日記』を休刊し、『カラマーゾフの兄弟』執筆に専念することになったのである。

父親殺しを主題のひとつとしているにもかかわらず、『カラマーゾフの兄弟』にある種の明るさと希望が感じられるのは、思想的な彷徨を重ねてきたドストエフスキーの晩年に、本論文が明らかにしたような過程を経て生じた思想的な転換のためである。ドストエフスキーが構想していた続編は、『カラマーゾフの兄弟』の完成後まもなく作家が急逝したために実現されることはなかった。

（論文審査の結果の要旨）

「絶望の作家」「残酷な才能」などと評されることの多いドストエフスキーの生涯の最後の５年間に何か希望への転換のようなものが生じていたことは、従来の研究でも言及される場合がときおりあったが、その転換がどのようなものだったかを具体的に考察した論考はこれまで皆無に近い。本論文は、このドストエフスキー晩年の思想的転換という問題に、シベリア流刑を契機として「空想的社会主義」からいわゆる「土壌主義」に移行した後のドストエフスキーの言説、特に『カラマーゾフの兄弟』に至る晩年の小説と、個人雑誌『作家の日記』に発表された時事問題や事件に関する論説とに焦点を当てて取り組んだものである。

序論で問題を提起した後、本論文は、重要と考えられるドストエフスキーの言説をひとつひとつ丹念に解読している。第１章では、作家の流刑体験に取材した『死の家の記録』を取り上げ、西欧由来の合理的・啓蒙的な刑罰制度がロシアの囚人にとっては「他律的な罰」に過ぎず、むしろ内なる精神上の苦悩に苛まれる囚人たちがその苦悩によって自ら浄化されていく「自律的な罰」にこそ、精神的な真の更生の可能性があると作家が考えていたことが指摘されている。

この「自律的な罰」は、ドストエフスキーの後半生の思考の軸となっていった。第２章の対象である『罪と罰』では、「自律的な罰」の理念は、「他律的な罰」である逮捕と刑を逃れようとする主人公ラスコーリニコフを断続的に襲う惑乱や夢として形象されている。当初の構想では自殺するはずだったラスコーリニコフが惑乱をくり返し、夢に苛まれながらも、最終稿ではシベリアで精神的な復活を遂げ、その代替のように自殺するスヴィドリガイロフが死の直前まで夢や幻を見ることのない人物として描かれているのは、ドストエフスキーにおいて悪夢や錯乱が「内なる罰」を表していることを示していると論者は指摘している。

以上を踏まえて、本論文は第３章以降で、晩年５年間におけるドストエフスキーの思想的転換を、『作家の日記』掲載の時事論説や短編の分析を通して、具体的に跡づけている。この時期に至るまでドストエフスキーを苦しめていたのは、「自分を愛するように他人を愛せない」問題、すなわち「自律的な罰」に至ることを自我や自尊心が妨げるという問題だった。妻に対する自分の依存と権力性を自覚していた作家が、当時発生したお針子の自殺事件に震撼されて書いた1876年の短編『おとなしい女』には、まだこの問題への解決の糸口は見いだされない。だが、そのわずか５か月後の『おかしな人間の夢』(1877)では、夢を見て自殺を思いとどまり、「他人のために直ちに善行に赴く」ことを決意する男の姿が描かれている。この急激な転換をドストエフスキーにもたらしたのは、両短編の間の時期に『作家の日記』に記事が掲載されたユダヤ系医師ヒンデンブルグの生涯だったと本論文は指摘している。自我や出自に執着しないヒンデンブルグはまわりの人の幸福を優先し、民族や階層の別なく治療して、しばしば代金を受け取ろうともしなかった。ドストエフスキーは、その反ユダヤ

主義にもかかわらず、地域のあらゆる民族、あらゆる階層が参列したこの医師の葬儀を感動的に描き出し、その生き方に「自分を愛するように他人を愛する」ために必要なことが行動であり、徹底して実践的でなければならないという教訓を見いだしたのだと本論文は述べている。このように自我の桎梏から解き放たれ、他者のために善行をなすことをドストエフスキーが実践に移したのが、この時期に継子殺人未遂の罪に問われていたコルニーロワを無罪にするべく『作家の日記』で彼が張った論陣であったことを、論者は第５章で指摘し、詳細にその過程を辿っている。

だが、ジャーナリストとしての活動よりも、創作を重んじたドストエフスキーは、ようやく自分に経済的安定をもたらした『作家の日記』を休刊し、『カラマーゾフの兄弟』（1879‐80）の執筆に専念する。本論文は第６章で、この長編の中でも特に裁判の場面に着目し、「他律的な罰」を目的とする陪審員制度への批判、および「全ての人間に対する罪の自覚」に基づく「贖罪としての善行」への志向として、無実であるにもかかわらず20年の流刑判決を受け入れるドミートリー・カラマーゾフの形象に、ドストエフスキーが最終的に至った境地の反映を見いだしている。

従来、印象批評的に語られることの多かったドストエフスキー晩年の思想的転換を、この作家の言説に即して具体的かつ一貫したかたちで説明し得たことは、本論文の画期的な点である。その際、創作に比べて二次的な文献とこれまで見なされがちだった個人雑誌『作家の日記』掲載の論説や短編を綿密に読み解き、ドストエフスキーの思想の軌跡を立体的・重層的に復元したことも高く評価できよう。とりわけ、ドストエフスキーが『おかしな人間の夢』の最終校正稿に大幅な推敲をおこなったことは、事実としては既に知られていたけれども、その内容を精査し、これが作家の思考の急激な転換の表れであることを明らかにした点は、ドストエフスキーのテキスト生成研究において世界的に見ても顕著な成果と言うことができる。

とは言え、本論文にも短所がないわけではない。作家自身の言説の分析を重視するあまり、①先行研究、とりわけドストエフスキーの思想に大きな影響を及ぼしてきた宗教思想に関する諸論考の参照が手薄であり、この点への言及がやや希薄であること、②引用が若干過多であり、議論がしばしば細部に渡った結果、主たる論理の展開が必ずしも辿りやすくはないことなどは、瑕疵として指摘しなければならない。だが前者は宗教性に収斂しがちな近年のロシア本国のドストエフスキー研究と一線を画することを目的とした、半ばは意識的な論者の選択である。後者は、論者自身も自覚しているところであり、また各章を個別の作品論として読んだ場合には、むしろその充実の一端であると見ることもできる。いずれにせよ、今後の研鑽において克服されるだろうことが十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2022年２月15日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。